

《調査報告》

孔大寺山の山岳信仰・霊場遺跡について

―山頂「大穴」遺構と孔大寺権現をめぐって―

若枚善満・岡寺良・森弘子

はじめに

宗像市池田と遠賀郡岡垣町高倉・内浦の境に聳える孔大寺山（標高四九九m）は、湯川山、金山、城山と並ぶ宗像連峰（宗像四塚）の一角であり、中腹には宗像三社（沖津宮・中津宮・辺津宮）、織幡宮、許斐権現と共に宗像六社の一つとされる孔大寺権現が祀られ、宝満修験の春の峰入り（宝満山葛城峯）の胎藏界九尊の峯の第十に当てられた山岳信仰の聖地である（第1図）。

また江戸時代前期に、貝原益軒により著された『筑前国続風土記』宗像郡・孔大寺山の項には、孔大寺権現の名の由来として、「山の頂に大穴あり。故孔大寺と號す」とあり、孔大寺の名の由来が、山頂の大穴に基づいたものであるとされる。

この「大穴」については、長らく伝承に過ぎないものと考えられていたが、近年、長野覺氏、江上智恵氏により、山頂一帯に、人工的に掘られた窟状の穴が見つかったことで、実在のものであることが分かった。

さらに、中腹にある孔大寺権現の境内一帯では、古代〜中世の土師器等の遺物が大量に散布することが知られ、「池田孔大寺遺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地となっており、それらの概要については過去にも報告されているところである（森二〇〇八・九州山岳霊場遺跡研究会

二〇一・海の道むなかなた館二〇一六）。

岡寺と森は、これら孔大寺権現の境内、さらには山頂の「大穴」について、孔大寺山の山岳信仰に関わる重要地点の可能性があると認識したため、『宗像市史』編纂における調査の一環として、若枚善満（荻田町教育委員会）の同行の下、現地調査を二〇一六年七月三日に行い、さらに二〇一七年十二月三日に、岡寺と若枚により補足調査を行った。本稿は、それらの調査成果を報告するものである。

一 孔大寺山頂周辺「大穴」の調査内容

（一）調査概要



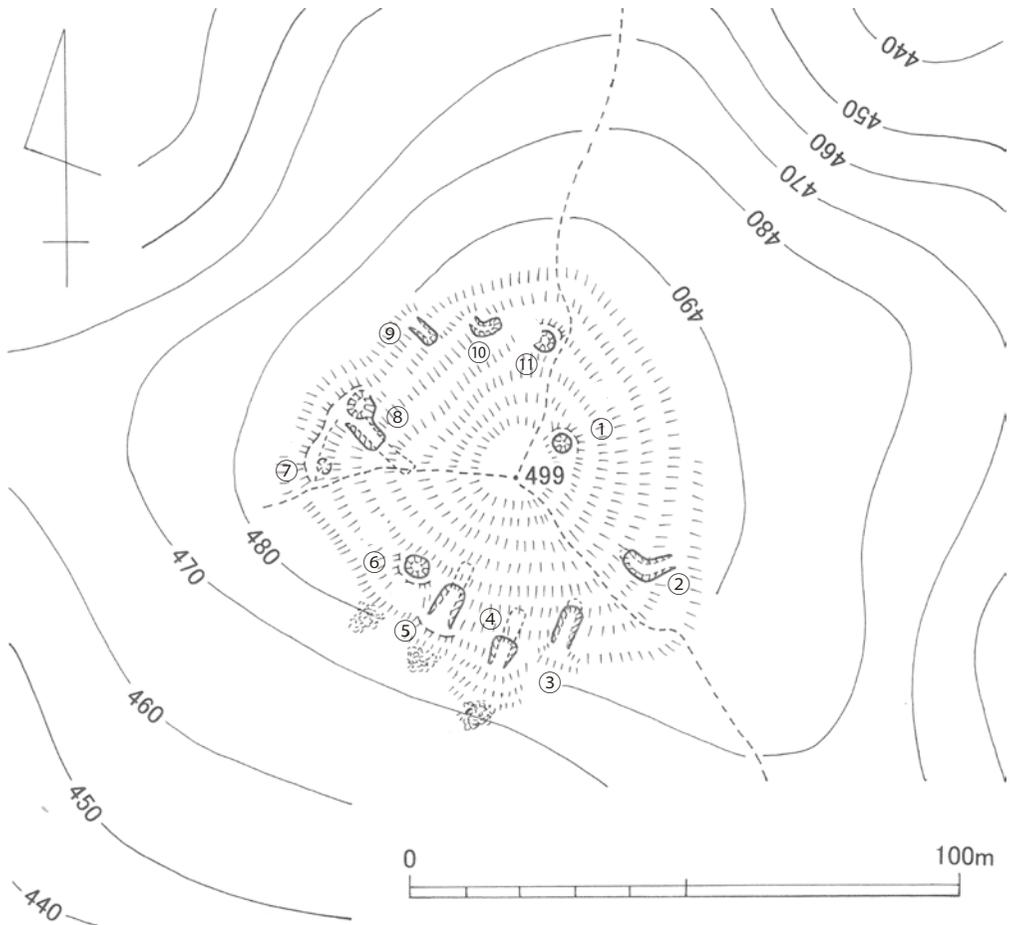
第1図 孔大寺山山岳信仰・霊場遺跡位置図 (1/25,000)

『筑前国鏡風十記』に記された「大穴」については、現地調査により孔大寺山山頂（標高四九九m）から一〇～二〇mほど下がった傾斜地において、明らかに人為的に横から掘削された穴七カ所と掘削後に埋没したとも考えられる窪地四カ所の計十一カ所が確認された。それらの分布・規模・構造等の把握を目的とし、位置図（第2図）および残存状況が良好な「大穴」一カ所（5号）について、平面図・縦断面図（第3図）を作成し、他の「大穴」については形状や残存状況の確認をおこなった。「大穴」の内部・周辺、窪地においては、明確な遺物は確認されなかった。

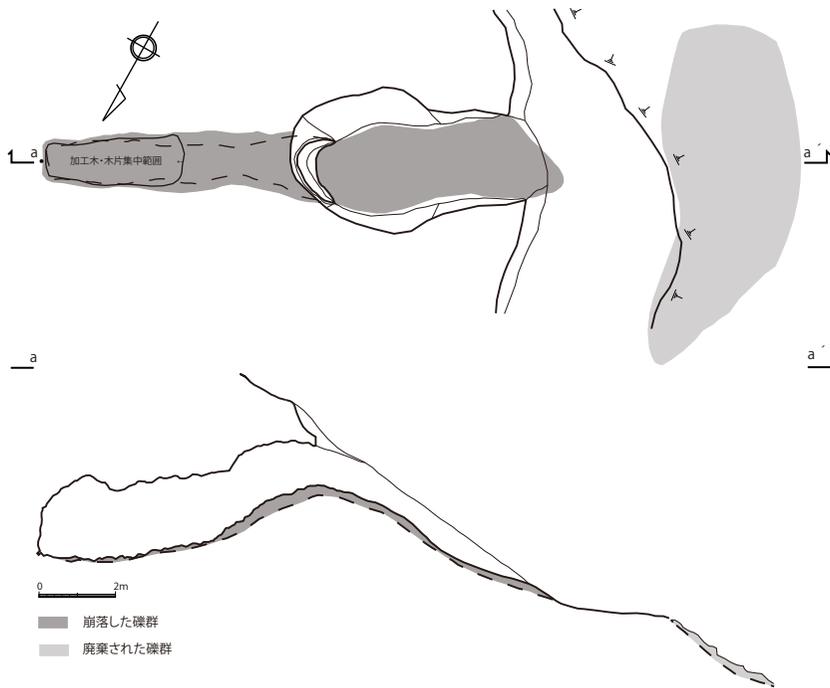
1号「大穴」以外は、ほぼ同一標高の傾斜面に位置し、西側稜線周辺に二カ所（7・8号）、北側稜線周辺に四カ所（1・9～11号）、南東側稜線周辺に五カ所（2～6号）が分布する。窪地については、それらの形状や、現存する「大穴」に近接すること、窪地よりも低い傾斜地で開口方向に掘削時に生じたと考えられる礫の集中が観察されることから「大穴」が埋没した箇所と推定した。

以下に、各号の「大穴」の形状・規模を述べ、測量を実施した5号「大穴」については詳述することにする。

1号は、円形挿鉢状を呈し、径約三・八mを測る窪地。2号は横穴形状で、天井部の落盤により奥壁が露出する。3号は、現存長さ約七・五mの横穴形状を呈する。4号は、現存長さ約七・三mの横穴形状である。6号は、円形挿鉢状を呈し、径約三・六mを測る窪地で、窪地より低い南西側に礫の集中



第2図 孔大寺山山頂「大穴」遺構配置図



第3図 5号大穴遺構実測図 (1/200)

が観察された。7号は、凹形掘鉢状を呈する窪地である。8号は、現存長さ約八・三m、幅約一・三mの横穴形状を呈し、奥壁が逆L字状に屈曲する。また8号の開口部北側には径約三・五mの窪地と礫の集中を確認した。9号は、方形状を呈し、長さ約四・五mの窪地である。10号は、平面L字状を呈し、短辺長さ約四m、長辺長さ約五mの窪地。11号は、凹形掘鉢状を呈し、径約三・六mの窪地。

詳細に実測調査を行った5号「大穴」は、幅約一・〇〜一・六m、高さ〇・六〜二・二m、全長約七・二mの規模で南西方向に開口する横穴形状を呈している。縦断面の形状は凸字状を呈し、現存する開口部を頂点として、内側・外側に向けて緩やかに傾斜する(第3図)。現状の外側は天井部・壁面の崩落により埋没するが、測量の結果、従来の開口部は現存する開口部より西側に約二mの位置に推測される。

内側には、高さ約二・二m、長さ約二m、幅約〇・六〜〇・八mの間が存在し、床面には、径約五cmの棒状の加工木や木片が中量に、径一〇〜五〇cmを測る礫が多量に堆積していた(写真3)。これらの礫は、基盤(地山)層の安山岩で風化が進んだため脆弱な地質を呈し、「大穴」掘削時・使用時からの経年による天井部・壁面から崩落した礫群と考えられる。崩落が少ない奥壁面においては、壁面を平滑に仕上げるなど整形に関係する加工痕は観察されなかった(写真3・4)。また、奥壁面のほぼ中央下部において、斜方向に径約三cm、深さ約八cmの人工的な穿孔ではないかと考えられる小孔が観察され、孔内部には木片が残存していた(写真5)。

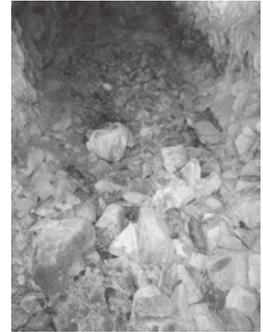
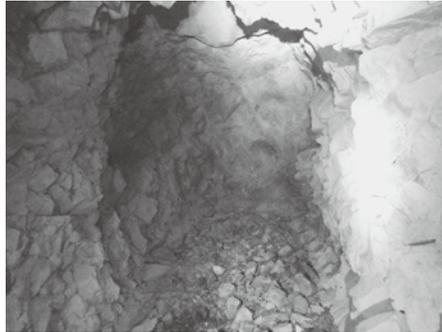
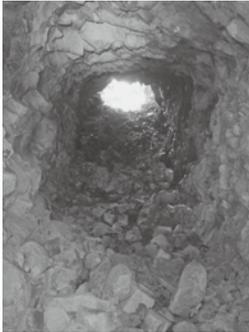
5号の開口部から西側にかけて緩やかに傾斜する幅二・二m、長さ五・二mの範囲においては、径五〜二〇cmを測る礫が中量に堆積する(写



1 5号「大穴」遺構全景



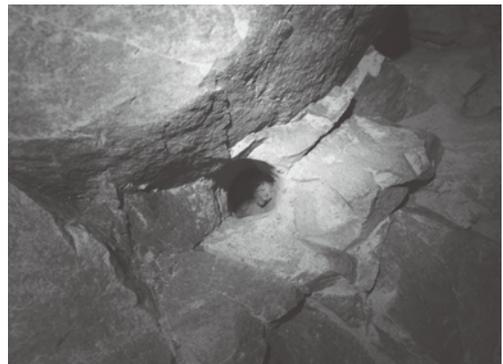
2 5号「大穴」遺構開口部



3 5号「大穴」遺構内部の状況



4 5号「大穴」遺構側壁状況



5 5号「大穴」遺構奥壁の穿孔状の孔



6 5号「大穴」遺構外側の礫群



7 6号「大穴」遺構（窪み形状）

写真1～7 孔大寺山山頂「大穴」遺構

真3)。これらも内側と同様に経年による開口部付近が崩落した礫群と考えられる。

5号の開口方向である南西側には、礫の集中が見られない幅約3mの平坦面が南北方向に展開する。北西側稜線あるいは南東側稜線に続く通路と推定されるが、北西側は6号の崩落礫群の堆積、南東側は3・4号の掘削により、各稜線への接続は現状においては不明瞭である。

5号の平坦面より、さらに南西側の傾斜地において、幅約8m、長さ約4mの範囲において、径五〜三〇cmの礫が集中する範囲を確認した。その分布範囲から、「大穴」を掘削した際に廃棄した礫と推定される(写真6)。

(二)「大穴」の性格等について

山頂において確認された「大穴」については、明確な遺物は確認されなかったため、現状では考古学的に時代を判断することは難しい。しかし、『筑前国統風土記』の「大穴」の記載から、十八世紀以前には、既に存在していたとみてよいであろう。

また、「大穴」の性格については、『筑前国統風土記』には、大穴について「宗像縁起に、昔は彼穴口に高棚をかまへ、未嫁女を生贄とせしに、神出て白馬の形を現し、或は大蛇の形をあらはして、其女を食せしと云」と記し、生贄を神に捧げる場である記載の存在を示している(ただし、益軒はこの見解に否定的である)。

生贄の場であったという説はさておき、この「大穴」の性格はいかなるものであろうか。宗像大社所蔵資料の『吉野期神事目録』には二月一日から四日まで孔大寺三所権現、千手堂法華会、高棚八所神供のことを記している(宗像神社復興期成会一九六一・六四〇頁)。ここにある「高

棚六所」が『筑前国統風土記』の「高棚」と同一であれば、山頂の「大穴」の前に高棚が置かれて神事が行われていたことが考えられる。しかしながら、本来の「大穴」の用途としては、そうなのであろうか。神供の場であったことを否定するわけではないが、本来の用途について、さらに考えてみたい。

まず、その一つには山岳修験の修行を行う参籠窟等の可能性が指摘されよう。しかしながら、山頂に無造作に複数築造されていることや、そもそもが窟修行自体が、自然に生じた空隙などを窟空間として瞑想を行うことにより自然と一体となるという自然崇拜に由来したものであることなどから、自然崇拜の思想に由来する参籠窟と想定することは不可能であろう。

また、人工的に掘削した痕跡であることから、鉦石採掘の痕跡ではないかという可能性も考えられる。江戸時代の文政年間に編纂された『筑前国統風土記拾遺』の宗像郡池田村の項には、「此村の北の方依嶽の麓にて元禄年中銅鉦有とて試に穿たり。銅多からすとて幾程なく其事止たり。釣山と云。又孔大寺の下にも所々穿し穴有」とあって、元禄年間に銅鉦採掘が試みられたことが記されている。この記載の「孔大寺の下」が、「孔大寺山山頂の下」という意味か、「孔大寺権現の下」という意味かで、場所が変わってくるが、今回調査した「大穴」群を指している可能性は否定できない。ただ、元禄年間に編纂された『筑前国統風土記』には、伝承を伴った形で「大穴」が存在していることや、銅鉦石のテストピット(試掘坑)にしては画一的な印象を受けることなどから、現段階においては推定にとどまると言わざるを得ない。

他の可能性としては次のようには考えられないだろうか。この「大穴」

が標高五〇〇m近くと宗像地域においては、ほぼ最高所にあたることや、「大穴」の形状からみて、穴の内側への雨水流入を防ぐことができること、さらには日光が差し込まない構造であり、穴内部の温度・湿度は一定するという特徴を有している。このような立地と構造上の特徴から、「大穴」は冬季に降った雪を蓄積し、春から夏にかけての温暖期まで、水を貯蔵するための「氷室」であった可能性が指摘できるのではなからうか。一年を通じて容易に氷を手に入れることができる現代とは異なり、夏の暑い時期に氷を入手することが困難であった近世以前においては、温暖期の氷は非常に重宝された。それは単に涼を得るなどの貴人の風流ばかりではなく、宗教儀式や祈禱において非常に重要な役割を果たしたという。孔大寺権現はもとより、宗像大社などで行われる儀式等に使用されていたことも想定できるのではなからうか。『筑前国続風土記』にも未婚女性の生贄の場所という常時立ち入ることがはばかられるような伝承が残されていることも、氷という貴重な財産を守るための附会とも考えられよう。

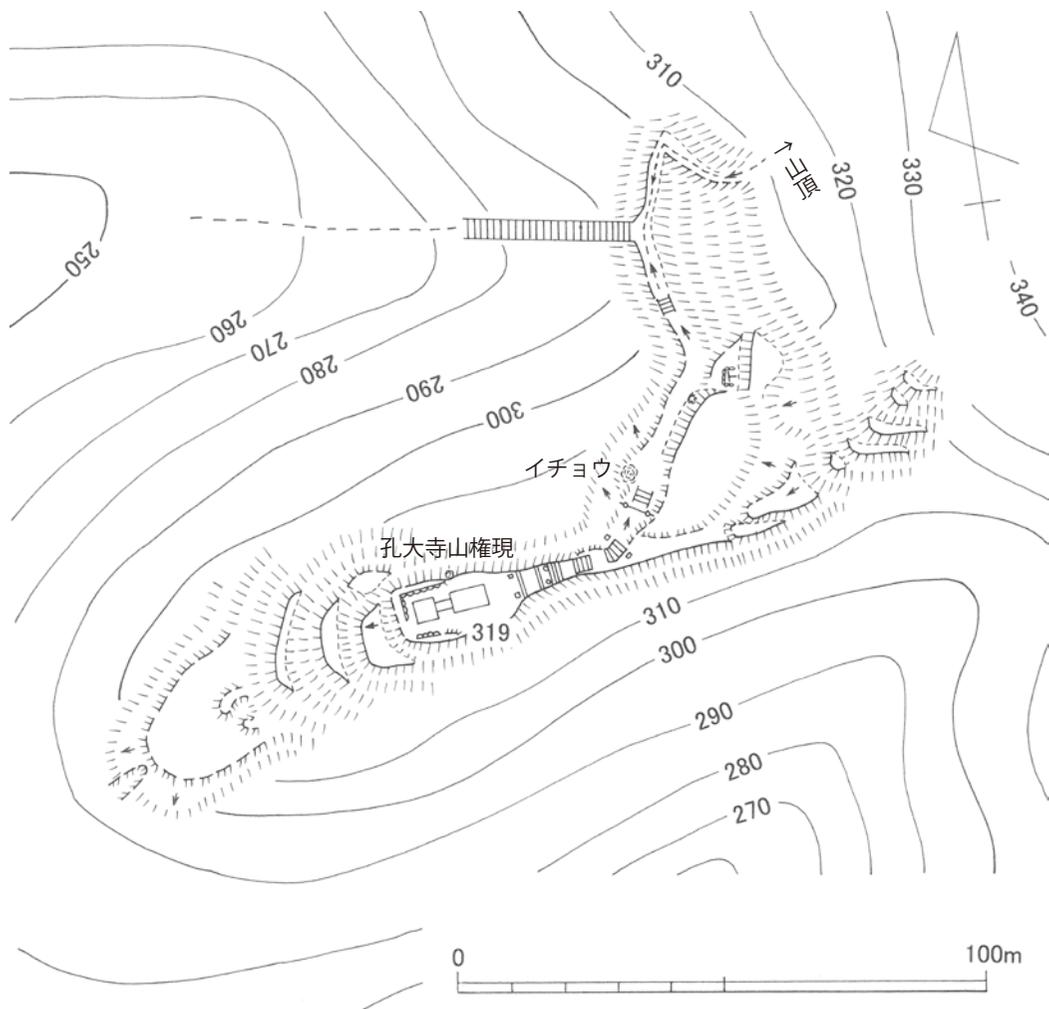
ただ、氷室と判断するには、いくつかの問題点もある。一つは、「大穴」の配置が氷室であれば、当然、日が差し込みにくい北向きを中心とした配置が良いのではないかと思うのだが、実際には、開口する方位に北への偏りは見られない。福岡県内における氷室としては豊前市の求善提山山中の近世のものなどが有名であるが、それは積石を伴っており、明らかに形状が異なっている。いずれにせよ、現状においてはこれ以上に想定が難しく、また銅鋳石の試掘坑の可能性も十分考えられ、断定も否定も言えないといったところである。

二 孔大寺山権現（神社）の調査内容

孔大寺山権現（神社）は、孔大寺山の西側中腹（標高三一九m）に鎮座する。『筑前国続風土記』には孔大寺山権現は、吉野の蔵王権現の一神であるとされる。また、江戸後期の文政年間に編纂された『筑前国続風土記拾遺』宗像郡・池田村孔大寺山神社の項には、「昔此御社繁昌の時山中に坊舎多かりしよし今も其址有」とあり、さらに神木の銀杏、千手観音堂のことなども記している。

この孔大寺山権現の社殿周辺には人工的に造成された平坦面群や大量の遺物散布が見られたため、現地調査の際に、岡寺が千分の一の縮尺により現況の境内平面図を作成した（第4図）。その図を基にまずは境内の状況を確認する。

孔大寺山の中腹、標高三一九m地点に、現在、孔大寺山権現の社殿が東向きに置かれており（写真8）、その社殿を中心に東西約一五〇mにわたって平坦面群が並列している。社殿から東へ下った尾根の鞍部には、福岡県の天然記念物に指定されている「孔大寺のイチヨウ」の大木がある。現在、胸高周囲は六・〇m、根廻り九・四mもある大木で、孔大寺宮の御神木とされ、地元で大切に護られている（写真9）。この銀杏については、『筑前国続風土記』では「めぐり五囲あり」、『筑前国続風土記附録』では「六囲余」、『筑前国続風土記拾遺』では「囲三三丈一尺稀世の喬木也」とある。三丈一尺は、約九・四〇・五mであり、根廻りの数値と合致する。さらに『筑前国続風土記拾遺』には「大木の銀杏ハ神木の外にも社の近辺に数十株生茂れり」とあり、また「社の下式町斗に大杉有」とあり、神木以外の銀杏の大木や杉の大木もかつてあったこ



第4図 孔大寺山権現境内平面図



写真8 孔大寺山権現

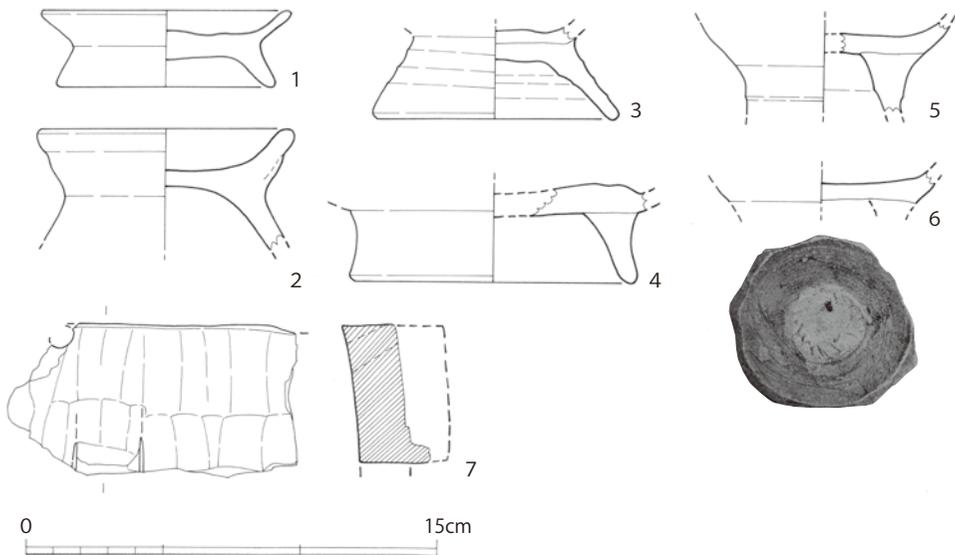


写真9 孔大寺山のイチョウ

とが記されている。『玄海町誌』（玄海町誌編纂委員会一九七五・四四二頁）には、「昔は杉の大木があつて「孔大寺杉」の名声を馳せていたが、戦中から戦後にかけて伐り尽され、また杉と並んで有名であつた大銀杏の樹群も戦後伐られし、ただ本樹（神木のこと）を残すのみとなつた」とあり、もはや存在しない。

この神木の銀杏の東側にはやや広い平坦地があり、その一带には大量に中世の土師器が散布している。九〜十六世紀と幅広い時期の遺物が採集されているが（海の道むなかつ館二〇一六）、若干の滑石製石鍋（第5図7）、すり鉢を除いてはほぼ土師器坏・小皿（一部高坏？）で占められており、さらには非常に特徴的な形態の脚が付されたものが大半を占めている（第5図1〜6）。それらの土師器は、すべて底部系切りのものであり、寸法などから十二〜十三世紀を中心としたものと考えられる。宗像大社所蔵文書から、鎌倉期の年中行事として、二月四日に「孔大寺護灯」があり、「正平年中行事」には二月の一日から四日にかけて、九州二島の大小の神祇を勧請して祀る盛大な祭事が行われたことが記されている。この時には千手堂の仏事や法華八講等が行われ、修二会の性格を持ったものだったとされ（森二〇〇六・五六六頁）、同文獻には、「孔大寺権現一所」として「眷属小神本地寺 山神一所 芥神一所 千手堂一所」とあつて、境内に末社二字と本地堂一字とがあつたことが分かる（宗像神社復興期成会 一九六一・六三九〜六四〇頁）。これら採集されている土師器は、このような祭祀のたびに大量に製作、使用、廃棄されたものと考えられる。

このように、孔大寺山権現社殿を中心に、中世期にはいくつかの堂舎が立ち並ぶ中で、宗像大社の重要祭事が行われていたことが想定されよ



第5図 孔大寺山権現境内採集遺物
(1～6：土師器、7：滑石製石鍋転用品)

う。神木の銀杏には隣接して観音堂があったと伝えられ（森二〇〇六・五六六頁）、現在、宗像市村山田の梅谷観音堂に安置されている孔大寺権現の本地仏とされた千手観音立像（正安三年（一三〇一）銘）もかつてはそこにあつたのであろう。江戸時代には、廃寺となっていたものの、宝満春峰において、「法華ノ道場」として二夜三日逗留の上、護摩を焚いたという重要箇所とされたのも、中世以来の孔大寺山の宗教的な重要性があつたからであらう。

ただ、この権現社殿があつた中腹一帯には、僧坊などの日常生活空間が存在するほどの平坦地を見出すことはできない。それは採集遺物に生活に関わるような陶磁器などの遺物はほとんどなく、祭祀に用いた土師器が大半であることにも表れているし、また社殿から参道の石段を少し下った場所に、わずかな水場があるが、せいぜい神仏に供える鬺伽水を供給する程度のものであり、僧たちの日常生活空間は、もっと麓の方に想定される。『筑前国統風土記拾遺』には麓の千足原の鳥居本という場所にかつて一の鳥居があり、その周辺に坊舎の址が多数みられると記している。また、『玄海町誌』には、「麓の方に、堀坊、仙岳坊、円城坊等の字名や坊址が多い」とある（玄海町町誌編纂委員会一九七五・一〇一頁）。千足原は麓の集落域であり、また、「堀坊」、「仙岳坊」については現在も、麓の遥拝所北側に「仙岳」の字や、池の名称に「堀坊」が残されている（「円城坊」については不明^②）。詳細な坊跡などは確認されていないものの、孔大寺山の僧坊は、麓にあつたと考えるのが妥当とみられる。

おわりに

今回の現地調査および記録作成により、孔大寺山に現存する山頂の「大穴」遺構と中腹の孔大寺山権現境内の遺構・遺物について、その概要を把握し、その結果、孔大寺山権現は、孔大寺山の山岳信仰の中心であり、中世期の遺物散布の状況と遺構の展開状況を確認することができた。その一方で、山頂の「大穴」遺構については、概要を提示することができたものの、その性格については、「高棚」の記載から、南北朝には神供の場である可能性があると共に、本来的には、氷室などの宗教色の濃いものと想定することができ、一方、銅鋳採掘のテストピットの可能性も十分考えることができ、山岳信仰に直接かわるものか否かを断定することができなかった。ただし、銅鋳採掘に関わるものであつたとしても、宗教的な色合いを指摘することもできる。それは、宇佐神宮に奉納された神鏡が鑄造された福岡県田川郡香春町の清祀殿の近くにある神間歩は、宇佐神宮奉納鏡を鑄造するための銅鋳石の採掘坑が、後に神殿化して祭祀の対象となっている事例であり、そのようなものである可能性も考えられよう。また、『筑前国統風土記拾遺』には先述の宗像郡池田村釣山で採掘した銅鋳により、東照院（宗像市池田）の喚鐘一口が鑄造されたと記されている。このように、孔大寺山山頂の「大穴」遺構が、たとえ銅鋳採掘坑であつたとしても、宗教的な側面については、むろん考えておく必要があるだろう。

【註】

(1) 5号大穴の石種鑑定については浦田健作氏（大阪経済法科大学客員教授）の御教示による。

(2) 坊に関する字名の所在については、船津建氏の御教示による。

【参考文献】

海の道むなかた館『むなかたの山岳信仰 ムナカタの考古学6』（平成二十

八年度秋の特別展図録）二〇一六年

九州山岳霊場遺跡研究会『北部九州の山岳霊場遺跡―近年の調査事例と研

究視点―』（第一回九州山岳霊場遺跡研究会資料集）二〇一一年

玄海町誌編纂委員会『玄海町誌』玄海町 一九七五年

宗像神社復興期成会『宗像神社史』上巻 一九六一年

森 弘子『宝満山の環境歴史学的研究』岩田書院 二〇〇八年

（わかすぎよしみつ 荻田町教育委員会／おかでらりよう

原始・古代部会／もりひろこ 民俗・美術・建築部会）